河出文庫

わが小林一三

清く正しく美しく

阪田寛夫

河出書房新社

kawade bunko

わが小林一三（こばやしいちぞう） 清く正しく美しく

◈

著者　阪田寛夫

一九九一年一月二五日　初版印刷
一九九一年二月　四日　初版発行

発行者　清水勝
発行所　河出書房新社
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-三四〇四-八六一一（編集）
〇三-三四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

デザイン　粟津潔

印刷・製本　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1991 Printed in Japan

ISBN4-309-40299-2

河出文庫

わが小林一三

清く正しく美しく

阪田寛夫

Kawade Bunko

河出書房新社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

プロローグ　九
1景　甲州韮崎　一四
2景　海を見た日　二七
3景　上方へ　四九
4景　結婚　八一
5景　箕面電車　一〇六
幕間　一三五
6景　宝塚新温泉　一四九
7景　日本歌劇事始め　一七六
8景　「我等の阪急」　三〇一

9景　少女歌劇　三三九
幕間　三五
10景　清く正しく美しく　三三六
11景　大臣落第記　三六四
エピローグ　四三
文庫版へのあとがき　四四〇
解説　辻井喬　四四四

わが小林一三（いちぞう）

清く正しく美しく

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

プロローグ

一九五七年の一月二十六日付ニューヨーク・タイムズに、小林一三（いちぞう）の訃報が写真入りで載った。二段抜きの見出しは「元閣僚、少女歌劇創始者の死」となっている。和服を着た遺影も電送されたものか、黒衣に頭から上を合成して作る葬儀用速成写真らしいのが、身だしなみのよかった故人に気の毒な気がするが、一月二十五日大阪発ＡＰの記事を私の拙い逐語訳で引用する前に、小林一三の眼について触れておきたい。

大阪に生れ育ちながら、ついに私は直接故人に逢う機会に恵まれなかった。報道写真でしか知らない小林一三の印象といえば、小さな体に比例した小さめの端正な顔、七三に分けた短い白髪と、その眼だ。特に大きな眼だったわけではなく、形容するのがむずかしいが、眼で覚える顔立ちというものがあるとすれば、小林一三がそれだ。列車の中から時の大臣と握手している写真、汽船のデッキに並んで立っている写真、空港あたりで美女たちにとりまかれている写真、ふしぎに旅立ちの場面が多い人だが、画面の中心近くに立つ小柄な老人の、白髪の下にその眼がついていれば、説明を見なくても間違いなく小林一三とわかるのであった。

昭和十五年（一九四〇年）、経済使節として石油供給の要請に、当時のオランダ領東インド（蘭印）総督政府のあるバタヴィアへ出かける際の新聞写真を、中学生だった私は今も覚えている。その年彼は六十七歳だが、やはり清潔な白髪と、どちらかといえばやさしげな、人の心を引

きつける眼で、甲板に大勢と並びながらひとり遠くを見つめていた。

ところで最近ごく親しい人から、少年時代にこの眼の鋭さに打たれた話を聞いた。彼は私とは違って、至近距離から初老の一三を直接見たのだ。ハーゲンベック・サーカスが来た年というから昭和八年で、その夏神戸に近い六甲山の、戦争中まであったロープウェイ山上駅に近い、桜里園という貸別荘に彼自身の祖父を訪ねて行った時の経験である。ロープウェイ同様貸別荘も阪急電鉄の経営で、ここを借りた人は朝事務所へ行って食料や雑貨を注文すると午後には大阪の阪急百貨店から山上まで配達してもらえる仕組になっていた。小林一三がその一号荘を使い、彼が泊りに行った祖父の家はすぐ下の二号荘だった。この人の祖父は南海電鉄に関係していたから阪急電鉄の小林とは顔見知りで、散歩で出逢うと立話をする。その朝は絶えず霧が谷から這い上って来て、下の岩場で離れて待っていた少年には先方の顔の輪廓もおぼろだった。それなのに眼の光だけが乳色の霧を貫いて見えたという。子供心に凄い眼の圧力だと感歎したそうだが、年譜をみると昭和八年夏は小林一三を総帥とする興行資本がのちの東宝として東京へ進出する前夜、また阪急社長の身分のまま請われて東京電灯の再建に赴いていた六十歳の一三が、郷誠之助男爵に代って社長に就任する直前でもある。因みに東京電灯は南満洲鉄道を別にすれば、当時我国第一の大資本の電力会社であった。

あらためて、先のニューヨーク・タイムズをはじめ、手に入った何枚かの写真を見直すと、なるほど一見、まなじりが八の字に下って愛想よげなのに、切れこんだ瞼に護られた深い場所に眼球が据わっていて、そう思えば随時発光しそうな近より難い気配がみえてきた。

小林一三が初対面の人から名刺をもらうところを見ていた人の手記がある。もらった名刺をそのまましまいこまずに眼の前にかざし、声に出して姓名を読み上げ、

「だれそれさんとおっしゃるんですな」

と念を押した上で、その視線を相手の顔にまともに投げかけ、「焼けつくように激しく」凝視した。「人の名前を忘れるようじゃ成功しない」と口ぐせのように若い部下を叱っていた小林だが、なるほどこれで名前と顔を同時に記憶できるのかと、見ていた人は舌をまいたという。

若い頃の写真の眼の光は素直だが、齢をとってから発光の奥行きが深くなって来ている。この眼で直視されたら恐ろしかっただろうと思われた。そして、その眼はまた、よく溢れる涙の容れ物でもあったことがだんだんとわかってくるのだが、――さて、冒頭の追悼記事の内容は次の通りである（カッコの中に、引用者であり訳者である私の註を入れた）。

「日本の有名な宝塚少女歌劇団（Takarazuka girls' opera troupe）の創始者小林一三が本日心臓病で死去した。八十四歳であった。彼は第二次世界大戦直前の公爵近衛文麿による二度目の内閣に於て商工大臣であり、戦争直後幣原喜重郎首相のもとに国務大臣であった。

小林氏は一八九二年（明治二五年）の慶応大学卒業生であるが、日本による真珠湾攻撃数カ月前に、商工大臣を辞した。当時彼はヒトラーが英仏との戦いに勝って世界経済はいずれナチ（ドイツ国家社会党）の線に沿って再建されるものと信じていたにも拘らず、日本の国家による経済統制に抵抗した。

彼は一九〇七年（明治四〇年）一電鉄線の経営陣の一人となり、数年後、大阪から宝塚まで三十マイル（実際は宝塚線と箕面支線を合わせて約二九キロ）の路線を運行するこの会社のヘッドとなった。営業促進のため、小林氏は宝塚終点を音楽ホールに転換しようと決意し、近郊の家庭の娘たちを募って、雪・月・花そして星と呼ばれる四つの組に編入し、音楽とバレーを教えた。

少女たちは西洋のフィニッシング・スクール（若い婦人に社交界に入る準備を授ける学校）に

似た課業を施す、郊外のオペラ学校に生活した。その行動の規律は極めて厳格で、少女たちの達し得難い香気は、彼女らをして日本人ファンのアイドルたらしめた。彼女らのモットーは『清くあれ、正しくあれ、美しくあれ』であった。

ために事業は大当りで、現在その電鉄は毎日七十万人の乗客を運んでいる。歌劇団は三百五十名の若い女性団員を持ち、多くの現代アメリカ・ヨーロッパのミュージカルやオペラやオペレッタを、日本固有の芸能と同じく立派に演じてきた。

小林氏は一九四六年（昭和二一年）陸軍元帥ダグラス・マッカーサーの指令に従って無任所大臣を辞した」

外国人特派員の筆になると思われる右の記事は、小林一三の生涯の要約としては、数字や固有名詞そのほかに小さな間違いが幾つか認められる点も含めて、いささか切口が大胆すぎるかも知れない。参考までに引用するが、たとえば『日本の企業家昭和篇』という書物のカバー裏に印刷された、小林一三の紹介文は次の通りだ。

「戦前いち早く大衆消費市場に着目した先駆的企業家。電鉄経営に宅地開発、娯楽施設、ターミナルデパートなどを組み合わすという独創的アイディアによって、阪急グループを作り上げた」

また私註を加えると、「阪急グループ」とは現在資本の上では阪急電鉄、阪急百貨店、東宝をそれぞれ中心とする三群に大別され、それらに属するホテル、劇場、映画、放送、バス、タクシー、不動産販売、旅行斡旋など、大衆相手に物やサービスや娯楽を売ることを主な仕事とする二百ないし三百の会社を言う。いまの常識でいえば、こちらの方が妥当な要約で、ＡＰ特派員のは、一人の男の生涯から根や幹を切り棄てて花だけを摘んだものと批判されることだろう。実はこれから書く小説も、同様に花の部分にこだわりすぎる、とのそしりを受ける恐れがある。だが、そ

れが私の好みであり、また「小説」と称するゆえんだとお許し頂きたい。

最後に最も私的な註として、私の下の娘が現在宝塚の生徒であり、ニューヨーク・タイムズ風に言えば、一三が作った「郊外のオペラ学校」で生活していることもつけ加えておかねばなるまい。没後今なお「校長先生」と呼びならわされるほどに、小林一三の生涯と分ちがたく結びつくこの団体の行動の規律が極めて厳格で、モットーが「清く正しく美しく」であることはニューヨーク・タイムズの報ずる通りで、「父兄」の一人として日頃よく承知している。歌劇団を創め育てた小林一三の影が、このようになお私や家族の身の上にまで及んでいる。

これでもう話を始めていいのだが、新しく何かを明らかにできるわけはなく、知り得た見聞だけを、お客様には退屈されぬよう、また間違えずに伝えたいと願うばかりである。

1景　甲州韮崎

明治六年（一八七三年）の一月三日に生れたので一三と名付けられたこの小説の主人公が、山梨県韮崎の生家で両親と一緒に過ごせたのは生後八カ月の間だけであった。彼の生涯を強く支配した事実の一つだ。

この年の八月に、母親が病死し、同じ甲州（山梨）の大きな商家から養子に来ていた父が離縁となって生家に戻ると、残された一三は三歳の姉とふたり、孤児として本家の大叔父の一家に引き取られてそこで大きくなった。大叔父は、一三の祖父の弟で、この人が家督をついだのは四人兄弟の上から三人がつぎつぎ早世した為である。小林の本家は布屋と称し酒造業、絹問屋、質屋をいとなんで、昔から商人の町である韮崎でも小野家の富屋と並ぶ大きな商家だった。町なかの甲州街道沿い一ブロックの本家の跡地が、いま「ぬのや駐車場」と、地区の小公民館と、児童公園になっていて、当時十一あったという蔵のうち残された一棟の大きさと合わせ考えると昔の規模がわかる。

三男坊だった一三の祖父は別家したが、先に言った通り早死して、その上連れ合いも先に死んでいたから、一三の生母も孤児として、同じ本家の世話になって成人した。彼女が養子を迎えて別家を再興したばかりの時に、またこうして一三とその姉が孤児になってしまうという不幸が続いたのだ。

「ココニ、二代ノ孤児本家ニ養ハル」

晩年、一三が過去帳に自分の家系を書き入れた文章の、結びの言葉である。

小林一三が生涯、無宗教を標榜し通したのも、小さい時に両親を亡くして宗教的な体験をする機会が無かったからだと言う人がいる。一三自身が、数多くの著述の中で、自分は母を亡くして以来葬式というものを出したことがない、従って家には仏壇も無い、

「親に育てられれば、なにしろ日本は仏教国だから、親の口から仏教に関する言葉くらいは聞かされていたかもしれぬが孤児の私には、さうしたチャンスも与へられなかつた」

と繰返し述べている。その代りに「無理をするな」とか「平凡主義」などの処世観が自分の宗教になったと彼は説いているけれども、実はこの境涯が一三の心の深みの中に「最後に頼むものは自分以外には決してあるものじゃない」という覚悟を次第に固めて行くのである。この景では、いわばその源流のあたりをたずねることにする。

「小林一三翁追想録編纂委員会」作成の年譜によれば、二歳の時に一三は祖父の立てた別家の家督を相続したが、自分ではどれだけの財産があるのかも知ることが出来ないままであった。もっとも、孤児ながら、本家の人たちからも町の人々からも「ぼうさん」と呼ばれて育ち、これは土地の言葉ではきわめて尊敬の度合の高い呼び名であって、韮崎の中で当時この名で呼ばれたのは一三ひとりだったと、実姉堀内たけよほか何人かの人が証言している。

「大変きかん坊で、この『ぼうさん』、何をしても負けたことなし……、曲ったことも大きらいで、親類の子と喧嘩をして、伯母さん達に怒られても、相手に悪いところがあれば、決してあやまりません」

「布屋（小林家）は造り酒屋だったので、酒粕が沢山あって、子供達のお八つにもなりましたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton